

JACTFL の 10 年と今後 The first 10 years of JACTFL and the near future

境 一三 SAKAI Kazumi¹

JACTFL の特徴は、何と言っても言語種の垣根を越えて、様々な言語教育の実践者と研究者が糾合したことにあろう。個別言語の教育にかかわる学会、研究会は昔からあった。しかし、それらが束になってかからなければなかなか日本の言語教育の状況は変わらないという思いがふつふつと湧き上がり、10 年前に沸点に達したということだろう。それぞれの言語を教えながら、ほぞを噛む思いを重ねてきた教員や研究者が JACTFL に集まった。これは、日本の言語教育史上、画期的なことではなかったか。

爾来 10 年の歳月を閲したが、私たちは幸いにもそれなりの成果を挙げてきたと言ってよいだろう。メンバーの働きかけによって、文部科学省（以下文科省）の「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」で英語以外の言語の研究が認められ、関係者が複数のグループで実践的研究を進めている。文科省の外国語教育推進室も、我々の存在を認知し、何かと声をかけてくれるようになった。文科省の中でも、徐々に JACTFL の存在感が高まってきていると感じるのは私だけではないだろう。

2022 年 9 月には Goethe-Institut Tokyo 主催で「ドイツ語教育の未来を拓くー持続可能なドイツ語教育に向けて」というシンポジウムが慶應義塾大学日吉キャンパスで開催されたが、そこで最初に挨拶に立った同大学外国語教育研究センターの七字眞明所長（教授）は、主催者の名前よりも先に共催者である JACTFL の名前を挙げられて驚かされた。私自身も、いろいろな会で JACTFL の理事であると紹介されることが多くなった。

さて、この原稿が掲載される予定の会誌『複言語・多言語教育研究』だが、ここ二三年、執筆希望者数（とそれに伴って投稿数）が非常に増えている。これも JACTFL の認知度が上がったことに起因しているだろう。編集にたずさわる者としては、年々増加する仕事の負担には難渋しつつも、より良い論考・報告が一本でも多く掲載され、日本の外国語教育の状況改善につながることを祈りつつ作業を行っている。

¹ 所属：獨協大学 Dokkyo University

特に、単一言語教育にかかわる学会では受け入れられないような、言語種横断的なもの、言語教育と他分野の教育の協働などのテーマを扱ったものを積極的に受け入れている。これも JACTFL ならではであろう。

日本社会は、コロナ禍で停滞はしたものの、大きな流れとしては外国からの労働力の流入と共に、多言語・多文化化が進んでおり、人口の減少と共に、この傾向は強まるものと思われる。日本は制度として移民国家になることを(未だ)是とはしていないものの、実態としてはすでにそうなっている。これを前提に考えれば、教育で最も力を入れなければならないのは、社会の多様性に対応した広汎な意識改革(日本社会は単言語ではなく、すでに多言語・多文化化しているという事実を認めること)と他者理解のための異文化間コミュニケーション教育であろう。そこでは、これまで言語・文化教育が担ってきた役割の重要性が改めて認識されなければならないだろうし、またこれまでの実践経験と研究成果を踏まえた教育政策が展開されていかなければならないだろう。

そこでは、JACTFL の果たすべき役割はますます大きくなるだろう。実証的研究をも踏まえた、具体的な政策提言がこれからの 10 年の柱となるだろう。